

## ○奇跡が起きた「たまげた話し」

■チリ北部のサンホセ鉱山に作業員33人が閉じ込められた落盤事故の救出作業は13日午後10時(日本時間14日午前10時)ごろ、最後の1人の引き上げに成功、全員の救出作業を完了した。カプセルの乗り方などを指導するため地下に下りた6人の救助隊員も、14日午前0時半(同午後0時半)すぎ、最後の1人が地上に帰還した。

■作業員の救出は8月5日の事故発生から69日ぶり、同22日の全員生存確認から52日ぶり。12日深夜に始まった救出作業は当初、48時間程度かかるとされていたが、救助隊員を増員するなどして、半分以下の約22時間半で完了した。

最後に救出されたのは、強い指導力を発揮していた現場監督のルイス・ウルスアさん(54)。(H22.10.15 産経新聞ヤフーニュースより抜粋記事)

■落盤事故から17日間、地下にわずかに残された食料に、作業員のうちパニックに陥るものもいたという。その時監督の、ウルスアさんは冷静に20日分の食料は確保しようと考え、1人当たり、小さじ2杯分の缶詰のマグロと牛乳1口、ビスケット1枚を1日おきに分配するという規則を決定。そして17日後に33人の生存が確認され、地上から支援物資が届くようになった。

■地上では17日後の「33人全員生存している」という、ウルスアさんからのメッセージがなければ、正に一触即発で絶望視する寸前。九死に一生を得た生き埋めになった33人が、14日全員が救出された瞬間、筆者は今世紀最大の「たまげた奇跡」と、思わずこの心境を書き留める義務感に駆られた。

33人もの集団が極めて狭窄状態のスペースに、多分ひしめき合っただけで閉じ込められた精神状態は「発狂」して、暴動が起きても不思議ではないことが、誰にも想像できる。

■ここでは救出機械である、オーストリアの滑車クレーンには触れない。無事生還した33人のヒーローにスポットを当てたい。33人が多分一度も奪い合いなく、17日間、わずかなマグロと牛乳で補給して体力を保持できた事。生存確率皆無の環境下、パニック症候群に陥る人もかなりいるはず。常に「死と隣り合わせ」の究極空間にありながら、全員が元気に生存して救出できた事は、「奇跡」以外の何物でもないような気がする。

■この事実は、「生きる」希望と勇気を捨てたものが、誰もいない事の証左であると言わざるを得ない。生きる「希望と勇気」を持ち続ければ、人間の生命力は持続できる「凄さ」に驚愕した人々は、恐らく世界中の「人間」すべてだと言っても過言ではない。

地上からの連絡が途絶えた17日間を克服できた以降の、救出ドラマは33人にとって正に「地獄」から「天国」。この間52日間は「生きられる」現実を実感しており、黒澤明監督『天国と地獄』のドキュメントを目の当たりにした。あらためて「生きる精神力」があれば「希望が叶う」事を教えてくれた、33人のヒーローに最大限の賛辞と祝意を贈ります。

(了)

コラムニスト 松浦 則雄